宝探し

海上なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宝探し

【Ｎコード】
Ｎ２８６６Ｄ

【作者名】
海上なつ

【あらすじ】
主人公の男の子が遺産のありかを探すお話。彼にしか与えられていなかったヒントを、一人でつないでいく。彼は無事に遺産を手に入れることはできるのか？※明かされないちょっとした謎あり。

前編：記憶の探検

おじいちゃんの家に、親戚がみんな集まっている。
3日前、大好きなおじいちゃんが病気で亡くなったんだ。
そして僕は今、大人たちに問い詰められている。
「何よコレ！冗談じゃないわよっ！！」
「なあ、おじいちゃんに何か言われなかったか？」
遺書に書かれていた内容が、どうやら納得できないらしい。
「ねえ、それ見せて」
母さんから、おじいちゃんの字で書かれた紙を受け取って、一部を読んだ。

遺産はある場所に隠してある。
最初に手に入れた者に全財産を相続させる。

「そんな・・・！？」
おじいちゃんらしい、と思った。同時にみんなが苛立っている理由がわかった。
あばあちゃんが亡くなってから、おじいちゃんは自分で「嫌われ者」だと言っていた。
実際、毎日のようにおじいちゃんの家に遊びに行っていたのは、僕くらいだった。
あの日もそうだ。
僕が学校で失敗して、ランドセルを置くのも忘れておじいちゃんに泣きついたことがあった。
「始めはしょうがないさ、気にしなくていい。それからが重要なんだよ。しっかりと覚えておきなさい」

そう言って、何度もなぐさめてくれたっけ。
明日、学校へ行ったらどうしようか。何をすればいい？おじいちゃんに教わったことをしてみた。そしたら上手く解決できたんだ。だから嬉しくて、母さんに話そうとした。
「今日ね、おじいちゃんにね――」
「また行ったの」
それだけだった。いつも反応は冷たかった。どうして・・・あんなに優しいのに。どうして嫌うの？

「自分勝手で子供っぽい性格、最後までなおらなかったわね」
あの時と同じ母さんの声がして、僕はドキッとした。
ずっと、そういうおじいちゃんの性格が苦手だったのかもしれない。
「まあまあ、今は探すしかないだろ」
父さんは家を見回して言った。
「せめて何かヒントでもあれば・・・」

そういえば、こんなこともあった。
「あ、これいいな」
一緒にテレビを見ていて、たまたま映った新作のゲームソフトの感想を言っただけだったのに、次の日、遊びに行ったらそれと同じものが用意されていた。
「ほしいものがあったら、遠慮しなくていいんだよ」
そう言って、僕に笑いかけたのを覚えている。
でも、あれから一度も「ほしい」と口にしなくなった。また買ってくるだろうと思って。
「こっちにいて、退屈じゃないか？」
寂しそうな顔で急にそう訊かれた時は、ちょっと戸惑った。
「全然そんなことないよ！」
僕は、そう正直に答えた気がする。
おじいちゃんの家は、ちょっとした探検ができるほど広くて、時計

集めが趣味らしく、入るとたくさんの時計に囲まれる。それが僕をわくわくさせたから。
「この時計の音、おもしろいね！」
いつも、目についたものを触ったり眺めたりした。楽しかったんだ。
「この時計の振り子、ワニの形してる！かわいいね」
「気に入ったかい？」
「うん、全部好きだよ！あのキツネのデジタル時計とかー、カエルの目覚まし時計も！」
「そうかい、ほしかったら持っていくといい。また買えるからね」
「ありがとう。でもどうしてこんなに集めるの？」
「そうだな・・・木の葉を隠すなら森の中、ってな」
おじいちゃんはその質問について独り言のようにつぶやいただけだったけど、あの時確かにそう聞こえた――。

「あっ！！」
もしかしたら、木の葉って遺産のことなんじゃ・・・。
今思うと、あの時すでに隠していたのかもしれない。
「どうしたの？何か思い出した？」
すぐに母さんが近寄ってきた。
僕は軽くうなずいてから、思ったことをしゃべった。
「この家にあるどれかの時計に隠されてるかもしれないよ」
それを聞いて、母さん達は急いで時計を調べだした。
「そういえばここの時計、百を軽く超えるって・・・」
途中でやめたのは、完全に独り言となっていたから。まあ、よかったかな。
さらに僕は思い出す。
その日の帰り際で、おじいちゃんは紙とペンを取り出すと僕を呼んだ。
「この文字をよく見て・・・」そう言いながら真っ白な紙に意味の解らないカタカナを並べていき、最後に「大事だからとっておきな

さい」と、渡されたものがあった。

すぐに自分の家へ向かって走った。
そして自分用の勉強机の引き出しの中を探す。
奥のほうで、くしゃくしゃになった紙切れを見つけた。
「これだ！」
あの時は理解できなかった、おじいちゃんの行動。きっと今なら何か分かるはず。
「えっと・・・『　ウヨリワサロ　』？？」
声に出して読んでみたが、さっぱりだ。
そういえば、ひっかかるな。どうして「文字をよく見て」なんて言って、わざわざ僕に書くところを見せたんだ？でも、書く過程で不自然なところなんてなかった。
関係ないのかな？この暗号を解くカギになると思ったんだけどなあ。
こうなると、おじいちゃんの台詞（セリフ）の全てに意味があるような気がしてきた。
過去をもう一度たどる。
そんなに昔のことじゃないんだ。頭に残った記憶を探るだけ。

「始めはしょうがないさ、気にしなくていい。それからが重要なんだよ」
何度も繰り返していたあの言葉。
そして『　ウヨリワサロ　』の文字。

――その瞬間、ひらめいた。
「そうかっ！！」
誰もいない静かな自分の部屋で、僕は叫んでいた。

後編：記憶の追加

再びおじいちゃんの家へ戻った僕は、目的の場所へと足を速めた。
あの時計に向かって。
前にちゃんと見ていた。大きなものだったから、きっとあの時と同じ位置にあるだろう。
そして――

「・・・あった」

喜びとドキドキが最高潮に達した瞬間だった。
ワニの振り子の裏。周りと同じ色のテープで、封筒が貼り付けられている。
中から、数字の0がたくさん並ぶ小切手が出てきた。
これは全部僕のものなんだ・・・。
少し考えてから、家の中にいる親戚達に問いかけた。
「ねぇみんな、僕の話を最後まで聞いてくれる？」
反応は早かった。
「もちろん！話してごらん」
「これ見て」
僕はみんなの探していたお宝を見せた。
「！！！・・・どこでそれを」
「その前に、これをもらってたこと黙ってたんだ。ごめんなさい」
今度は『ウヨリワサロ』という謎の言葉が書かれた紙を見せた。
「何これ？これが何だって言うの？」
「宝の地図だよ」
にっこりと笑って、続けた。
「この地図にはちょっとした仕掛けがあってね、この言葉がないと解らないようになってた。ほら、あるでしょ？炙り出しとか水につ

けると浮き上がるみたいな・・・」
冒険ものの漫画やテレビが好きだったので、つい喋りすぎた。
「で、何なんだ！？」
イライラした大人たちに先を促されて、僕は慌ててその言葉を口にした。
「始めは気にしない、それからが肝心」
「え？？？」
「だから、このカタカナの一画目をそれぞれ消して、別のカタカナを作るんだ。ちなみにおじいちゃんの書き順に沿ってね。僕はそれを知ってる」
すぐに他の紙を持ってきて、鉛筆で一文字ずつゆっくりと書きながら説明する。
「まず『ウ』という文字の、始めの上の縦棒・・・これを消すと『ワ』になる。次は『ヨ』の一画目・・・Ｌを逆にしたようなところを消すと、これは『二』になる。それで『リ』は『ノ』。『ワ』は『フ』」
ここまで呆然と僕の動作を見ていた周りから、やっと声がかかった。
「な、なるほど・・・じゃあ『サ』は？あの人はどこから書いたの？」
「横棒からだよ。出てくる文字は『リ』」
「じゃあ、『ロ』は『コ』か？」
うなずいて、すぐに縦棒を消した。
これで地図は完成した。
「ワニノフリコ？・・・ワニの振り子かっ！」
「そう。この家で、ワニの目印の振り子がある時計は、あの大時計しかないよ。お金はあそこに隠されていたんだ」
さっき宝を発見した場所を指差して言った。
「・・・最初から全部お前にやるつもりだったんじゃないか？」
「え？」
「だってそんなの俺達は知らなかった！これまでちゃんと接してこ

なかったから・・・」
伯父さんは後悔した様子だった。
「そうだね、兄さん」
父さんも母さんも、反省したように言う。
「もうちょっと優しくしてあげればよかったんだ」
「そうね、悪いことしたわ・・・」
僕はそれを見ていて、悲しくなった。おじいちゃんを思う気持ちが強くなるには遅かったから。
「このお金、僕以外のみんなに均等にわけたいんだ」
視線が一気に僕に集まる。
「それなら、ケンカしないでしょ？」
今、自分がどんな顔してるのかな。意識しなかったけど、それを見て誰かが涙を流したのは分かった。

「ふぅー」
やっと落ち着いて、大きく息を吐いた。
あの後、みんなはおじいちゃんの家を離れて、それぞれの家へ帰っていった。
そして僕は今、自分の部屋のベッドに横たわっている。
もう窓から光が入らない。
一休みしようと、そのまま目をつぶる。

そういえば、おじいちゃんから一個だけ時計をもらったんだっけ。
でもそれは、しばらくして壊れてしまって、今は無い。だから忘れていたんだ。

「それじゃあ、お前にふさわしいこの時計をあげよう」
そう言って僕に差し出したのは、二匹のネコが乗っているだけの小さなものだった。
「まるでコピーしたみたい」

僕がそう言ったのは、二本足で立って遠くを見つめたような格好や、色や形、全てがそっくりだったから。せっかく二匹もいるのに、同じなんてつまらないな。自分が作るんだったら、絶対に変えるのに。そう思って、気になった。
すると、すぐにおじいちゃんは説明してくれた。
「ある童話をもとに、十年前に作られたものだそうだ。だからその話を読めば同じな訳が解るんだが・・・まあ、残念だがここにはその本は無いがね」
「そっか！でもなんでこれが僕に合ってるって？」
「ヒントは漢字。それがお前の名前になるからだ。いつか解る日がくるだろう」
「・・・僕の名前？」

おじいちゃんはそれ以上何も教えてくれなかったし、あれから深く考えることもなかったな。
でもこれも、今となれば簡単な謎だ。
これからも良い思い出としてしまっておこうと思った。今度は忘れないように。
大好きなおじいちゃんと一緒に・・・。

後編：記憶の追加（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございます。海上なつ（元：空音）です！

ところで、ここでは登場人物についての情報がほとんど明かされていないんです。短い話だからいいかな？と思ったのですが、解りづらかったらすみません。ですが、主人公の名前は推理することが可能です。年齢も大体推測できるようにしたつもりですので……。

それでは、またの機会に。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2866d/

宝探し

2010年10月9日08時57分発行